



「湖医会」総会

10月24日(土) 14:00～ 滋賀医科大学基礎実習棟B講義室

CONTENTS

地域の病院に想う	井上徹也・山本育男	2
教授就任あいさつ	目片英治・今井晋二・松村一弘	5
病院長就任	大野雅樹・来見良誠・服部智任	8
海外からのメッセージ	小林勝弘	11
同期会 医33期生会	全 梨花	13
支部会 大阪支部	江尻新太郎	14
滋賀支部	木築野百合・今村武史・初田直樹	15
キャンパスニュースCatch-Up		19
事務局から	総会の案内 ほか	28

地域の病院に想う

精神科総合病院での
内科医としての役割

医療法人杏和会 阪南病院
副院長 井上 徹也
(医7期生)



2011年は東日本大震災が起こったという忘れられない年ですが、私にとっても大きな転機を迎えた年となりました。3月11日は血液内科最後の外来診療日であり、その最中に大きな揺れを感じたのでした。そして、4月1日より、大阪府堺市の精神科総合病院である阪南病院に身体合併症全般を診る内科医として赴任しました。

精神疾患は生活習慣病と同様に誰もがかかりうる病気であり、精神科医療需要は、多様化し、かつ増大しています。2008年の患者調査では精神的疾患をもつ患者が323万人となり、その背景には認知症やうつ病の増加が大きく影響しています。こうした中、国は外来・地域ケアを基本とした医療への転換を目指し、乳幼児・児童から高齢者までの幅広い年齢層を対象に、多様な疾患に

対して、早期の支援が可能となる体制を構築し、入院医療は高度の内容のものを短期間集中的に提供し、その後は地域ケアに引き継いで行くという方向性を打ち出しました。精神疾患も、これまでの4疾患(がん、脳卒中、急性心筋梗塞、糖尿病)に加えられ、5疾患となりました。阪南病院はこういった現状に対応すべく、地域立脚型医療の推進と専門性の確立を二本柱に、機能改変を行い、現在、総病床数690床のうちスーパー救急病棟168床、急性期病棟111床、亜急性期病棟120床、合併症治療病棟51床を有し、24時間・休日体制の精神科救急医療を担っています。また、児童精神科病棟25床、全室個室のメンタルケア病棟35床、認知症病棟60床を有しています。さらにストレスケアやリワークを支援する地域生活支

援センター、認知症鑑別診断を行う認知症疾患センター、発達障害支援センター、訪問看護ステーションなどすべての精神疾患領域に即応できる体制を整えています。

ここでの課題はやはり身体合併症への対応です。精神疾患患者も健常者と同様に身体疾患に罹患することは言うまでもなく、むしろ高率に身体医療上の問題が発生すると考えられます。精神疾患を有するが故に、不利な生活環境や衛生環境、経済状況に置かれ、また、治療による副作用もあり、一般科より難しい状況にあります。こうした状況下で、私は阪南病院に赴任したのですが、当初は常勤内科医が私以



外一人で看護師を含めたコメディカルも身体合併症の診療経験がほとんど無いという状態でした。“どうしよう”と思いながら、まず、医療スタッフの教育と検査・診断体制の充実を図りました。検査技師を増やし、医療機器を整備し、そして何よりも内科医を増員させ、現在では常勤医5人体制となりました。さらに放射線科にも常勤医を確保することができました。おかげで現在、30～50人の入院患者を常時診ており、また外来も月～土まで毎日行っています。さらに、一昨年から理学療法士・言語聴覚療法士も採用し、身体リハビリテーションも行えるようになりました。また、私の現在の専門といえる医療関連感染・医療安全管理もともに管理加算Ⅰを取得出来るようになりました。

こうして赴任後4年が経過しようやく精神科での身体合併症対応が出来てきたと考えていますが、逆に、現在一般科での精神疾患合併症対策が問題となってきました。阪南病院も以前より近隣の一般科病院との連携はある程度とってはいますが、なかなか上手くいっていないのが現状です。行政もそこには危機感を持っており、大阪府でも本年8月より精神・身体合併症支援システムが稼働します。今後ますます、身体合併症患者の増加が予想されます。阪南病院でもさらに対応を考えていかなければと考えています。

さて、阪南病院が位置する堺市は、古代には仁徳天皇陵古墳をはじめとする百舌鳥古墳群が築造され、中世には海外交易の拠点として「自由・自治都市」を形成し、わが国の経済、文化の中心地として繁栄してきました。戦後、臨海コンビナートと泉北ニュータウンの造成により、現在84万人の人口を有する政令指定都市として、関西の文化・経済を牽引しています。阪南病院も堺市のみならず大阪府・関西の精神科医療を牽引出来るよう発展にしたいと思います。



地方(田舎)における 医師の偏在に想う



京都ルネス病院
外科部長 山本 育男
(医7期生)

京都府福知山市にある京都ルネス病院に赴任して12年。

病床数192、外科医は院長を含めて5人。年間の外科全身麻酔手術が約300件、私が担当する消化器外科関連が約200件。

月曜日に京都市内から出勤。途中、園部の高校の看護科で午前中授業した後、福知山の病院に到着。週に2、3日は手術、4日は外来担当。診察時間が6時間を越えることもあり、その後に緊急手術になることもある。

54年前に長兄は小学2年生という可愛い盛り、白血病で3ヶ月という短い闘病生活で急逝。亡き父は、京都府立医大から亡骸を抱えながら電車に乗って滋賀の家に帰ったと聞かされた。私はその1年後にこの世に生を受けた。

医学生の中には小児科医になり白血病治療を専門にしたいと考えていたが、学年が進むにつれ子供が死ぬことの重責に耐えられないとの思いが募り、大人の癌治療をするために外科医を選択した。

私が医者になった頃、抗癌剤とは副作用は強いが抗癌効果はさほど期待できるものではなかった。しかしながら、この15年の抗癌剤の進歩には目を見張るものがある。副作用を予防する薬の開発も著しい。

大学院時代、腸管の壁内神経叢による蠕動運動調節機構を研究していた。腸管上皮のEC細胞から分泌されるセロトニン(5-HT)と壁内神経叢の5-HT神経やSubstance-P知覚神経が蠕動運動の力ギを握っているのではないかという仮設で動物実験に明け暮れていた。その後、癌の臨床において画期的な制吐剤としてまず5-HT₃受容体拮抗薬が登場し、さらに求心性知覚神経の伝達物質であったSubstance-PのNK-1受容体に対する拮抗薬が登場、日々化学療法に伴う嘔吐軽減のためにこれらの薬を使っていることに因縁のようなものを感じる。



京都府北部では勤務医の希望者が少ないことで様々な歪みを引き起こしている。地方(田舎)に赴任を希望する医師は少ない。子弟の教育環境の貧しさや、自分たちの生活(Quality of My life)の質を保ちたいためであろう。このため、地方の病院では中堅(30~40代)医師の確保が難しく、結果として地方の病院の臨床、教育機能が劣化してきている。それが更に、医師確保を難しくする負の連鎖に陥っている。

地方の時代という掛け声だけがむなしく過ぎる現状を打破するためにも、まず君たち若手の医師が積極的に地方に赴任し活躍する方法を探らなければと想う日々です。



バックの胡蝶蘭は医局で私が育てているものです。

教授就任 ごあいさつ



滋賀医科大学総合外科学講座

教授 目片 英治
(医8期生)

【略歴】

●1988年6月
滋賀医科大学附属病院 医員(研修医) 第一外科
●1989年8月
グアムメモリアルホスピタル 外科臨床研修
●1989年10月
滋賀医科大学医学部附属病院 医員(研修医) 第一外科
●1990年6月
草津中央病院 外科
●1996年4月
恵佑会札幌病院 外科
●1997年4月
滋賀医科大学医学部附属病院 医員 第一外科
●1999年2月
滋賀医科大学医学部附属病院 助手 第一外科
●2002年4月
滋賀医科大学医学部附属病院 助手 消化器外科
●2005年4月
滋賀医科大学医学部附属病院 講師(学内)
●2007年4月
滋賀医科大学医学部附属病院 腫瘍センター副部長
●2008年10月
滋賀医科大学医学部附属病院 腫瘍センター長
●2011年5月
滋賀医科大学医学部附属病院 腫瘍センター 講師
●2015年6月
滋賀医科大学 総合外科学 教授

2015年6月16日付けで、滋賀医科大学総合外科学講座の教授を拝命いたしました。

私は、学生のころ「いざという時に頼りになる医師」になりたいと漠然と考えていました。卒業後は、命に関わる疾患に対応できる医師を目ざし外科医の道を選び、「自分の手」でできること、臨床に役立つ技術を少しずつ習得していきました。専門医制度の中では消化器外科を専門とし、悪性腫瘍、急性腹症、外傷などに対する診療に携わってきました。大学院での研究などを通じて、免疫治療や化学療法にも興味を持つようになり滋賀医大の腫瘍センターにおいては、悪性疾患の患者さんに対して、総合的な治療方法を提供すべく勉強させて頂きました。学生のころの考えから外れることなく今があるような気がします。

総合外科学講座は大学の講座でありながら、臨床の活動拠点が、地域の中核病院である東近江総合医療センター(八日市インター横)にあります。平成22年1月に策定された「滋賀県地域医療再生計画」に基づき、東近江市の国公立3病院(国立病院機構滋賀病院、東近江市立能登川病院、東近江市立蒲生病院)の集約化、再編が行われ誕生しました。地域で発生する全ての外科的疾患に対応できるよう、外科系診療科の枠を取り除き診療にあたっています。私がこれまで専門的に関わってきたがん医療は、病院だけで完結できるわけではないので、地域の診療所や病院の医師そしてメディカルスタッフが一致団結して患者さんを支えていけるよう心がけています。また地域の病院では優れた医療技術と、さらにいわゆる「全人的医療」が必要となります。患者さん、地域の方、医療関係者から頼っていただける総合医療センターを目指して精進していきたいと考えています。

まだまだ若輩者で東近江においては新参者であります。同窓会の先生方には多方面にわたりご指導、ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

教授就任 ごあいさつ



滋賀医科大学整形外科学講座
教授 今井 晋二
(医9期生)

【略歴】

- 1989年6月1日
滋賀医科大学医学部附属病院 整形外科・研修医
- 1990年4月1日
滋賀医科大学大学院医学研究科博士課程入学
- 1996年1月1日
滋賀医科大学医学部 解剖学第一講座・助手
- 1996年6月1日
ヘルシンキ大学医学部 整形外科にて留学・研究
- 1998年11月1日
日本学術振興会・特別研究員(PD)
- 2000年7月1日
アムステルダム自由大学 歯学部にて留学・研究
- 2001年7月1日
滋賀医科大学医学部 整形外科学講座・助手
- 2004年11月1日
滋賀医科大学医学部附属病院 リハビリテーション部・助教授
- 2012年5月1日
滋賀医科大学医学部 整形外科学講座・准教授
- 2015年8月1日
滋賀医科大学医学部 整形外科学講座・教授

2015年8月1日付けで、滋賀医科大学整形外科学講座教授を拝命いたしました9期生の今井晋二です。同窓会の先生方に教授就任のご挨拶を申し上げます。

私は平成元年に滋賀医科大学を卒業し、同年、滋賀医科大学整形外科学講座に入局しました。入局当時は、我が国の脊椎外科の草分け的存在である福田眞輔教授が教室を主宰されており、数多くの脊椎疾患の受け持ちを担当させていただきました。当時は、リウマチの大家であった初代教授の七川欽次教授の影響が色濃く残っており、教室員も定期的に三重県にある七川記念榊原リウマチセンターに研修に赴いては、七川先生に「頭にカミナリが落ちる」がごとき、厳しい指導を受けたものです。

その後、大学院に進学し、骨・関節器官における神経解剖のテーマで第一解剖学講座の故前田敏博教授に指導を受けました。当時の第一解剖学教室では日々の研究が終わると前田教授のお宅で盃を片手に研究談義することが多く、野崎元副学長や堀池現副学長ともこの場にて懇意にさせていただきました。

大学院終了後の平成8年6月から平成10年3月までヘルシンキ大学整形外科に留学し「人工股関節のゆるみ」

について研究しました。帰国後の平成10年11月からは、本学初の日本学術振興会・特別研究員(PD)に就任し、平成12年7月から平成13年6月までアムステルダム自由大学歯学部において「骨の運動刺激と抗加齢作用」について研究しました。

平成13年7月に帰国し、第3代松末吉隆教授の主宰されている滋賀医大整形外科学講座に助手として復帰しました。当時は、大学附属病院の再開発事業がまさに始まろうとしていた時期で、平成16年11月にリハビリテーション部助教授を拝命し、懸案とされていた回復期リハビリテーション病棟(46床)の設置準備に尽力しました。

この間26年、一貫して整形外科の研究・教育・臨床に携わり、これまでに 22名の博士号を当時の主任教授の元に指導しました。臨床では、上肢外科、特に肩・肘の外科を専門にしており、平成26年には滋賀県内の鏡視下肩関節手術の72.6%を執刀しました。ここ数年は滋賀県全域に加えて他府県からもご紹介を頂き、症例数は直線的に増加しております。

もとより身に余る重責ではございますが、教室と整形外科の発展の為、尽力する所存でございます。今後とも引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

教授就任 ごあいさつ



滋賀医科大学家庭医療学講座
特任教授 **松村 一弘**
(医11期生)

【略歴】

●1991年
滋賀医科大学医学部医学科卒業
●1991年
滋賀医科大学第三内科 医員 (研修医)
●1992年
清恵会 近江温泉病院 内科 (研修医)
●1993年
滋賀医科大学第三内科 医員 (研修医)
●1993年
滋賀医科大学大学院入学
●1997年
滋賀医科大学大学院卒業 (医学博士)
●1997年
滋賀医科大学 救急部 医員
●1997年
大阪府保健医療財団 新千里病院 内科 医員
●1999年
誠光会 草津総合病院 内科 医長
●2000年
Baylor College of Medicine (U.S.A.) Cell Biology research fellow
●2004年
滋賀医科大学 内科 (内分泌代謝科) 医員
●2005年
同 救急集中治療部 助教
●2006年
同 救急部病棟医長
●2007年
同 救急集中治療部 副部長
●2008年
同 救急集中治療学講座 助教
●2008年
同 救急集中治療学講座 講師
●2011年
同 救急集中治療学講座 准教授
●2015年
同 家庭医療学講座 特任教授
現在に至る

滋賀県および大学の意向により、平成27年4月1日付けで家庭医療学講座特任教授を拝命いたしました。大阪出身で、滋賀医科大学医学部医学科の11期生です。在学中は準公式野球部に所属し、すばらしい先輩・後輩ならびに同期にめぐまれ、関西地区優勝(全学)と西医体3連覇を経験させていただきました。医師になってからも、野球部はもとより滋賀医科大学の諸先輩・後輩および同期の先生方の手助けをいただき、何とか医業をこなさせていただいており、母校の温かみを感じております。

プライマリー・ケアおよび地域医療を担う家庭医療学講座の歩みは、平成9年4月にメディカルコーディネーションセンターとして救急部、集中治療部そして総合診療部の三者が一体性のもとに滋賀医大で運営されるようになり、平成16年4月には救急部と集中治療部が救急集中治療医学講座となり、総合診療部は平成20年に家庭医療学講座(初代三ツ浪健一教授)となりました。国内において、本学はそれらの動きの先駆けとなっており、家庭医療学講座の設立、全人的医療の体験実習、全人的GP教育、里親教育等は日本の医学教育のみならず、米国や英国の家庭医・大学教官等にも高い評価を受けています。

そのような講座を担当させていただくことを光栄に存じるとともにその重責を痛切に感じております。今後19番目の専門医として総合診療専門医(仮称)が設定され、本学でもその養成が出来るよう準備していきたいと考えております。そして少しでも多くの卒業生が研修先に滋賀医科大学を選んでもらえるよう努力していく所存です。

私自身、このようにいろいろな先生方に御支援いただきましたことに心から感謝申し上げますとともに、少しでも滋賀医科大学と滋賀県の医療の発展に貢献できるように、未熟で微力ですが精進してまいりたいと考えておりますので、皆様方の御指導御鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

病院長就任の ごあいさつ



独立行政法人
国立病院機構紫香楽病院
病院長

大野 雅樹

(医1期生)

平成27年4月1日付で、独立行政法人国立病院機構紫香楽病院長に就任いたしました大野雅樹と申します。私は、昭和56年滋賀医大を1期生として卒業し、小児科に入局いたしました。その後は、国立立川病院に赴任し2年と少しの間東京で暮らし、滋賀に帰ってからは、平成16年まで滋賀医大小児科に奉職しておりました。その間、アメリカ留学もさせていただき、これは今のところ一生の中でもっとも充実し、楽しかった時間となっています。平成16年の4月からは、京都女子大学の児童学科というところで、教育・研究に携わり、この度ご縁がありまして、紫香楽病院に来ました。

前職の大学で所属していた学科は、子どもを多方向から勉強あるいは研究していく所で、私は体の成長や疾患、あるいは事故の予防などを中心に



教え、研究してまいりました。その中で、強く思ったことは、一人の子どもと対したとき、体や健康のことはもちろんとても大切ですが、それに加え、一人の人間としての人格、これまでおよびこれからの人生、子どものい gedacht、そして子どもの家族のことなど、多くのことに思いをめぐらさなければ、その子の良い育ちを支援できないということでした。

このことは、重い障害や重い慢性疾患を持たれている方にも、よく当てはまると思うようになりました。そのことは、本院に来る大きなモチベーションになりました。またその実践には、多職種による協働が、重要なキーワードだと思っています。

当院の診療の大きな柱として、重症心身障害児・者の医療とともに、神経難病に関する医療があります。滋賀県で専門的に診療している数少ない施設の一つであり、今後も重点的に取り



組んでいきたいと思っています。

紫香楽病院は自然豊かな環境にあり、横には信楽高原鉄道のかわいい車両が走っています。また、新名神の信楽インターから、信号に引っかからなければ、60秒以内で病院玄関に到着しますので、ぜひ一度お越しください。

最後に、医師、看護師を随時(ほとんど常時)募集しておりますので、お気軽にお問い合わせください。全人的かつ専門的な医療、看護ができます。

病院長就任の ごあいさつ



独立行政法人
地域医療機能推進機構
滋賀病院 病院長

来見 良誠

(医1期生)

平成27年4月1日、滋賀医科大学学長塩田浩平先生のご推挙によりJCHO滋賀病院(旧:社会保険滋賀病院)病院長に就任しました1期生の来見良誠です。平成27年3月31日、滋賀医科大学総合外科学講座教授および独立行政法人国立病院機構東近江総合医療センター副院長を退職し、独立行政法人地域医療機能推進機構滋賀病院に着任いたしました。独立行政法人地域医療機能推進機構(略号:JCHO)は、平成26年4月1日、(旧)社会保険中央総合病院・(旧)大阪厚生年金病院など全国57の公的病院が一丸となって地域医療の充実を図ることを目的として発足した大きな規模の公的組織です。

当院は天津市にあり最寄り駅はJR石山駅で、滋賀医科大学から最も近い公的病院であります。地域医療の実

践と教育のできる関連病院のひとつとして、都市近郊型の地域医療を充実し地域に貢献するとともに、臨床研修や学生実習においても協力できるよう急性期診療と総合医を育成できる仕組みを構築していきたいと思っています。

都市近郊型の地域医療は遠隔地型の地域医療とまったく異なりますが、東近江総合医療センターでの4年間の副院長の経験を生かし、急性期病院としての専門性を堅持しながら、高齢化に備えた総合診療の充実をはかりたいと思います。病床数325床、年間健診者数43,000人の検診センター、および入所者数100名の老健施設を有した医療機関は、学生実習・臨床研修において滋賀医科大学の機能を補完できる最適の医療機関と考えています。



当院は医師の大半が滋賀医科大学の卒業生で構成されており、院長・副院長を始め多数の診療科の部長として活躍しています。滋賀医科大学との連携を更に強固にし、これからの医療情勢に適応できるように、専門診療を推進しながら地域医療の充実を図り、さらに地域医療機能推進機構のミッションを遂行するために滋賀県全体の医療に貢献できるような仕組みを構築し、滋賀医科大学の卒業生が地域で活躍したくなるような病院にしたいと思っています。今後とも滋賀医科大学の各講座の先生方、卒業生の皆様のご支援を賜りますようどうぞよろしくお願い申し上げます。



病院長就任の ごあいさつ



海老名総合病院
病院長
服部 智任
(医5期生)

平成27年4月1日付で、神奈川県にあります社会医療法人ジャパンメディカルアライアンス海老名総合病院の院長に就任いたしました5期生の服部と申します。

私は昭和60年滋賀医大卒業後、日本医大泌尿器科で卒後研修を受け、平成12年に現在の病院に就職いたしました。卒業後、関東に来てからも定期的に開催される滋賀医大同窓会の関東支部会は毎年の楽しみで、可能な限り参加させていただいております。関東支部会では学長からのお話を冒頭いただくことが近年恒例となっております。その中で前学長の馬場先生、そして現学長の塩田先生から滋賀医大の発展を願う熱い想いを感じております。私自身が関東にいながらもチャレンジ精神に富んだ滋賀医大スピリットを意識できるのは、この同窓会



活動のおかげと感謝しております。(幹事を務めてくれる8期生の河崎先生にはいつも本当に感謝しております)

さて、当院の概要ですが神奈川県の県央と呼ばれる県の中央に位置する469床の急性期病院です。場所としては東名高速道路海老名サービスエリアの近くといったほうがわかりやすいかもしれません。社会医療法人という一般の民間病院より公益性を求められる民間病院として、また地域医療支援病院としての役割も担っており、周辺医療機関と連携を取りながら急性期医療の提供をしています。当院がある神奈川県県央地域は日本全体が人口減に向かっている中、人口増加が続くと同時に高齢化も急速に進むと推定されている地域です。現在年間6500台以上の救急車を受け入れています。人口動態の推測から救急

医療のさらなる強化が必要と判断し、平成29年4月の救命救急センター開設に向けて準備を進めています。

当院は関東にある病院ですが、滋賀医大卒業生が私以外にも2名在職しております。臨床研修指定病院でもあり看護教育も熱心に取り組んでおりますので、卒業生あるいはこれから卒業される方でご興味のある方は是非下記までご連絡ください。

t_hattori@jin-ai.or.jp

 海外からの
メッセージ

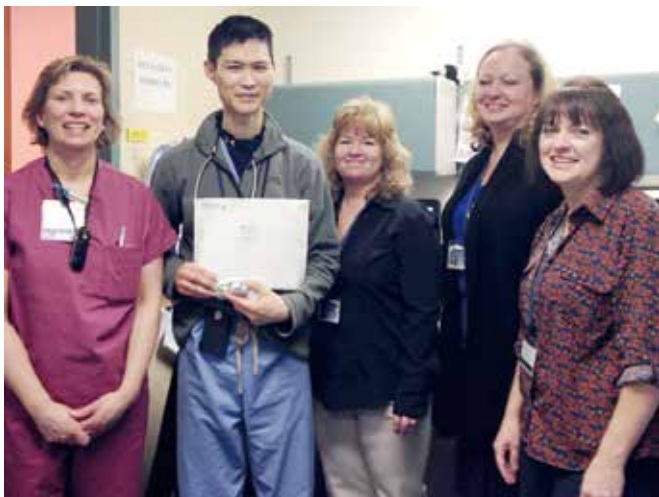
State University of New York, Upstate Medical University
Department of Radiology, Division of Interventional Radiology

小林 勝弘 (医13期生)



アップステート ニューヨークから こんにちは

「湖医会」の皆様こんにちは。私は9年間住んだアメリカ、テキサス州ヒューストンから2年前にニューヨーク州北部のシラキュースという街に引っ越してきました。シラキュースは北海道の旭川とほぼ同じ北緯43度に位置し、冬には多くの雪が降ります。私は現在ニューヨーク州立大学アップステート校の放射線科スタッフとして日々研鑽しています。こちらの様子をご紹介します。



今年3月のNational Doctor's Dayに表彰を受ける
(放射線科のナースと秘書さん達と一緒に)

現在の職場と仕事

私の所属する画像診断科は34名の放射線科医、4名の物理士および23名のレジデントで構成されています。私が専門とするInterventional Radiology (IR) のDivisionには私の他に4人の同僚がいます。朝の8時から夕方5時過ぎまで、画像のガイド下に様々な症例をこなしています。アメリカのIRは日本に比べて守備範囲が広く、経皮的胃瘻 (gastrostomy)・腎瘻 (nephrostomy) 造設術、腎移植後の合併症に対するインターベンション、門脈圧亢進症に対するTIPSなど日本ではあまり経験しなかった症例もよくやっています。その他に外来での診察、医学生、レジデントへの講義・臨床研究の指導などを行っています。こちらの医学生の臨床能力はまるで日本の研修医のようで、物おじすることなく患者を診察する姿には感銘を受けます。



苦勞する英語

アメリカに来て11年が過ぎましたが、英語には未だに苦勞しています。病院内で使う英語は限られるため、仕事はなんとかできますが、同僚および患者さんとの雑談となると英語の壁を感じる事がまだまだあります。小学生の娘に言わせると私の英語の発音は“ぜんぜんダメ!”とのこと。例えばNew Yearを私が発音すると新しい耳(ear)と彼女には聞こえるようです。隣の家のMaryさんは私が発音するとMerry Christmasの”Merry”になっているとのこと。Snowも最後のWの音が聞こえない!と言われる始末です。とにかくゆっくりしゃべる、自分の話が通じているか確認する、場合によってはナースに通訳してもらうなどの日常の仕事に問題が無いように気を遣っています。



Upstate Medical Universityの小児病院の前で

美しいアップステート ニューヨークの自然

ニューヨーク州北部は自然に恵まれています。過去に2度の冬季オリンピックが開かれたレークプラシッドを含む広大なアディロンダック州立公園が近くにある、素晴らしい秋の紅葉が楽しめます。またこのあたり一帯にあるフィンガーレイクスという人の指のように細長い湖沼群に沿って大小、無数のワイナリーがあり、秋には多くの観光客で賑わいます。ニューヨーク州北部に来られる機会があればぜひ、お声をお掛け下さい(kobayask@upstate.edu)。

遠く離れたニューヨーク州北部から「湖医会」の皆様の益々のご活躍と母校の発展を祈念しています。



ナイアガラの滝で

同期会

33期生

研修医を卒業して

—医学科33期生同期会—



滋賀医科大学医学部附属病院
母子・女性診療科
全 梨花 (医33期生)



去る2015年2月28日(土)に医学科33期生の同期会を行いました。

この春で卒業してから2年が経ち、研修医生活が終わり、それぞれに専門の道へと進んでいく節目の時期でありました。滋賀医大を卒業して、滋賀医大附属病院で研修を行っていたのは30人ほどでしたが、この日は違う病院で研修を行っていた人も集まり、40人ほどで楽しい時間を過ごすことができました。遠くは東京からも参加してくださり、久しぶりに会う友人と研修生活のエピソードや将来の展望、プライベートでの出来事など、話に華が咲き、あっという間に時間が過ぎました。

同期会では、あらかじめ用意した近況写真や残念ながら欠席された方からのメッセージなどを読み上げさせていただきました。会場から近況エピソードも聞けて、みんなそれぞれのところで活躍している姿が目に見え、嬉しかったです。結婚・出産を経験している同級生も多く、学生時代とは違う一面を見ることができました。

4月からは専攻医としての生活が始まり、研修医時代とはまた違う出会いの連続です。5年後、10年後とひとりひとりが成長して、また同期会を行い、たくさんのエピソードを聞ける機会を楽しみにしています。

Niho(電子カルテ)の写真は、1年目の研修医の先生からの卒業プレゼントのケーキです。

滋賀医大はみんな和気藹々、楽しく仕事をしているので、また滋賀医大にも遊びに来てください！



支部会

大阪支部



あさかぜ診療所 院長
江尻新太郎 (医5期生)

大阪支部会報告

平成27年6月21日(日)難波御堂筋会館で第4回琵琶湖カンファレンス in 大阪(「湖医会」大阪支部)が開催されました。天候にも恵まれ、計21名の御参加をいただきました。今回も、勤務医、開業医の先生方の基調講演、並びに滋賀医科大学の新任教授をお迎えしての特別講演を賜りました。

勤務医の高塚光二郎先生(3期 まいづる協立診療所)は、私の剣道部の2年先輩で、一隅を照らすが如く「舞鶴での医療活動20年」を作務衣姿で、語ってくださいました。

同じく剣道部2年先輩で開業医の吉成尚先生(4期 吉成医院)は、「東日本大震災後の地域医療の試み」として、診療所造設、規模拡大を通して、必死に逆境を乗り越えられたご様子などを示され、(故)佐野利勝副学長から賜った"尚志"というお言葉で、まとめていただきました。

特別講演は、安藤朗先生(4期 内科学講座 消化器内科教授)に、今まさに旬な話題の「腸内細菌と健康の関わり」について、実例を交えての解りやすいご講義を頂戴しました。その後の懇親会も盛り上がり、私も肩の荷が下りた思いでした。

今回の当番世話人を、卯津羅祥子先生(8期 うづら医院)にお譲りして、和気あいあいのうちに散会となりました。今回、前夜祭と称して諸先輩方を北新地、鶴橋とお連れした挙句、無理矢理我が家にお泊まり頂き、(江口教授に

戴いたお酒で)夜遅くまで昔話で盛り上がり、さらに本会前にも難波で一足早く祝杯を上げるなど、腸内フローラに悪影響を及ぼしたことを反省するとともに、お付き合い下さった諸先生方はじめ、御参加くださった皆様に篤く御礼申し上げる次第です。

出席者名(敬称略)；

- 1期：仲谷吉記
- 2期：阿部孝、江口豊
- 3期：高塚光二郎
- 4期：安藤朗、戸川雅樹、吉成 尚
- 5期：原岡正志、山内栄二
江尻新太郎
- 6期：椋田稔朗
- 7期：小宮靖弘、横田徹
- 8期：卯津羅祥子、目加田篤
横田千晶
- 10期：近藤浩之
- 13期：京川進
- 34期：松永隆志



支部会

滋賀支部

第1回 湖医会 滋賀支部会に参加して



きづきクリニック 院長
木築 野百合
(医5期生)



平成27年7月12日 日曜日 草津駅からすぐのところにある、ボストンプラザホテルにて、「湖医会」滋賀支部の第1回同窓会がありました。

県内に在住もしくは勤務している滋賀医大卒業生(医学科、看護科)が対象ですので、1,000人をこえる母集団のうち参加者はおよそ30人(1期生から15期生)、女性は私を含め2名、看護科の卒業生は世話人に名前を連ねてくれている山下氏おひとりでした。

昨年の準備会のときと近い顔ぶれで、話題は皆の近況報告とこれからの会のあり方についてでした。今回は滋賀医大の病院長先生や学長先生をお呼びせず、同窓会員だけで、学内の事情、医師会の事情、それぞれの所属している病院の事情を忌憚なく話して、次の会に繋げようという趣旨でした。学内の教授に就任されている先生、県内の各病院の院長に就任されている先生、郡市医師会の会長、(今回体調不良で欠席でしたが、県の医療行政の核、健康福祉部次長)肩書きをならべるとそうそうたる面々でした。

お話も、みなさん、同窓会のことを思い、滋賀県の医療を考え、そして、患者さんのことを配慮して活躍されていることがよくわかる内容で、このパワーとパッションを滋賀県の医療の

推進に、医学界の研究の発展に、相互協力できるとよいものができるだろうと思われました。

特に、学外の病院勤務の先生が「僕は研究がしたいんです。」とおっしゃられていたのが印象的で、大学の先生方と連携をとって、研究成果ができれば、素晴らしいことだなと感動しました。またダイエットに成功したというのを報告されている先生もおられました。

今回の会では、若い先生方のご参加が得られず、女性が少なく、看護師さんがひとりだけという淋しい部分もありました。今後、この会の方向性として、その組織のトップの先生だけでなく、若い先生方や行き詰まって先輩や同窓生の力を借りたいと思っている卒業生が参加してSOSを発信できる、そういう組織になるといいなあと思います。

木築は女性医師支援の立場と、滋賀県に医師が定着してくれることを目的に、独身の先生方に対してのお見合いイベントの発案をしました。具体的には何も決まっていませんが、県医師会があまり乗り気ではないこの企画を、同窓会で実現できればと思って発言しました。

まだ、船出して日も浅く、湖医会滋賀支部丸がどこへ航行するか未知数ですが、みなさんのパワーを集結し、同窓生のため、在校生のため、滋賀県民のためになることを願い、今回参加されてなかった先生がたへの「よろしくお願いします。」のメッセージを加え、第1回の報告に代えさせていただきます。

支部会



滋賀医科大学薬理学講座
准教授
今村 武史
(医7期生)

今年、「湖医会」滋賀支部が発足し、初めてとなる支部会が7月12日に草津駅前のポストンプラザホテルで開かれました。この場を借りまして、その様子をご報告したいと思います。

ご存じのように「湖医会」は発足後30年以上経過し、支部会も全国各地で開催されております。関東支部会は今年17回目の開催となるそうですが、驚くべきことに滋賀支部は昨年まで存在しませんでした。大変不思議に思うところですが、周囲の方々に尋ねたところでは単に「灯台もと暗し」?的な問題だったようです。ともあれ湖医会幹事の皆さんを中心に昨年(平成26年)夏より滋賀支部発足準備会が活動を始め、この度めでたく第1回支部会開催となりました。

当日は素晴らしい好天に恵まれ、汗だくで参集されました皆さんの熱気そのままに、支部会は前川 聡 代表(医1期生、滋賀医科大学内科学教授)の御挨拶から始まりました。大学における最近の動きや卒業生の動向、滋賀県下の医療事情から各病院のアピールまで幅広いお話が、引き続いて支部世話人、「湖医会」会長および副会長の皆さんからも披露され、乾杯のお酒やビュッフェの豪華料理もそっちのけで?興味

深く聞かせていただきました。次いで、野々村 和男 世話人(医4期生、守山市民病院院長)のご厚意で編集していただいた大学開学当初の学内や瀬田駅周辺の写真の数々がスライド投影され、懐かしい光景に会場から歓声が挙がりました。最後に参加者全員から一言メッセージがあり、開業されている方や悩み多き中間管理職の方々を含めて大学や地域医療に対する率直な意見や改善への熱弁が続き、終了予定時間を延長する大変な盛り上がりとなりました。

こうして記念すべき第1回の滋賀支部会は、この日の暑さに負けない熱気溢れる中で閉会となりました。あっという間の3時間でしたが、懐かしくも楽しい時間を過ごさせて顶きましてことに御礼を申し上げますと共に、準備に当たられました関係者各位に感謝申し上げます。

滋賀支部

近江八幡市立総合医療センター
脳神経外科部長
初田 直樹
(医10期生)



梅雨空の合間の7月12日、第1回滋賀支部会が草津で開かれました。出席に際して、最近途絶えている同期生との交流や情報交換を期待して申し込みました。蓋をあけてみると、来場者は上期生が主で、10期生は私一人でした。上期生順の出席者名簿では下から5番目の位置に名が書かれておりました。ただ、その中の大半は顔見知りの先生方で、いろいろな話ができて、楽しいひと時を過ごせました。

さて、会の中で討論されていた、滋賀に医師を残す、特に卒業生を残すためには何ができるか、何を発信していくかという議題があり、色々な立場からの活発な発言があり、興味深いものがありました。参加者のご子息が医学部受験で地元に残れなかったこと(地域枠があれば良かった)、学士入学生が多いことなどに言及されていました。地域医療に根付かせる学生を育てていくには、地元からもっと入学者を増やすべきだ!と。

地域枠の考えは確かに必要なことと思いますが、自分の学生の頃に遡って鑑みるとどうでしょうか。少なくとも、私個人としては(今でこそ地域医療の一担い手ですが)地域医療を

やりたくて医師になった訳ではなく、医療界に飛び込んで、吸収できることは吸収して、更に症例や実績を積めるところで自分を磨こうと考えていたと思います。知識欲や向上欲は狭い殻に閉じ籠ってでは得られないと思います。

では、打開策は何か。地元出身者の如何に拘わらず、楽しくやりがいをもってできる環境を作ってやることでしょうか。我々一般の病院の医師も、大学とうまく付き合っていける環境、一旦外に出てもまた、戻りたくなるような環境を作りあげることが、医師の滋賀県への定着を促せる一助になるのではないのでしょうか。

このためには、学生のうちから種を蒔く必要があります。大学のスタッフの先生方には大変でしょうが、大学に残りたくなるようなシステム構築や環境を作り、学生を引き寄せ、医師になってからは、この滋賀支部会などを利用して、県内の病院の良いところを知ってもらい、うまく連携していければよいと思います。この滋賀支部会が発展し、更には若手の先生も来やすい会にしていこう尽力すべきと考えます。

支部会

滋賀支部



渡辺同窓会長



前川支部代表



野々村支部世話人



キャンパスニュース Catch-Up

滋賀医科大学2014 ACTIVITY DIGESTから

スキルズラボ棟完成



スキルズラボ棟の外観

スキルズラボ棟が完成しました。シミュレータを機能的に配置することにより、実践的な医療・看護技術が効率よく取得できるように工夫しました。学部では臨床実習入門、客観的臨床能力試験（OSCE）本試験等に活用しました。

スキルズラボ棟内



医学科OSCE前
実習の様子

低侵襲医療の実践

内視鏡手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ」

平成25年3月、内視鏡手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ Si」を導入しました。ダ・ヴィンチを使った手術は、医師が3D画像を見ながらロボットを遠隔操作することにより安全で正確な手術を行うことができ、泌尿器科で前立腺全摘出術等を開始し、その後、消化器外科、呼吸器外科、女性診療科でも導入し、平成26年度において58件の手術を実施しました。



- ①腹腔鏡下前立腺全摘術:42件（保険適用で実施）
- ②腹腔鏡下腎部分切除術:5件（臨床研究3件、自由診療2件で実施）
- ③腹腔鏡下膀胱全摘除術:2件（臨床研究で実施）
- ④腹腔鏡下腎盂形成術:3件（臨床研究で実施）
- ⑤腹腔鏡下直腸低位前方切除術:2件（臨床研究で実施）
- ⑥胸腔鏡下縦隔腫瘍摘出術:1件（臨床研究で実施）
- ⑦腹腔鏡下单純子宮全摘術:3件（臨床研究で実施）



救急医療・災害医療体制の充実

ヘリポートの稼働

ヘリポートの完成に伴い、ドクターヘリや防災ヘリによる救急搬送受入や搬出を行っており、地域における広域救急医療体制の充実を図っています。

●ドクターヘリ搬送による緊急救命手術の成功例

長浜市で発症した急性肺塞栓症の患者さんに緊急救命外科手術を施術し救命に成功しました。この致命的な重症事例に対応できたのは、初期病院での適切な診断・対応、ドクターヘリによる迅速な搬送、大学の受け入れ体制整備によるものです。



テープカットを行う関係者



ドクターヘリ搬送訓練の様子

キャンパスニュース Catch-Up

重点プロジェクトの推進

本学の特徴を生かした5つの研究を「重点プロジェクト」として推進しています。

■平成26年度の主な研究成果

1. サルを用いた研究

遺伝子組換えカニクイザル作出のための基盤技術(レンチウイルスベクターの構築・ウイルス粒子の調製・受精卵への感染・仮親への移植)を概ね確立し、全て本学で行えるシステムを構築しました。

カニクイザル800頭を飼育管理しています



2. 神経難病研究

脳内アミロイドβの産生を阻害しアルツハイマー病の発症を抑制するタンパク質ILEIを発見しNature Communications2014に発表しました。さらに、ILEI分子に基づいた治療法や診断法の開発に向け、トランスレーショナル研究に着手しました。

また、アルツハイマー病の鼻分泌液サンプルによる診断法の臨床研究を実施しています。これらの成果に対して21件の報道がありました。

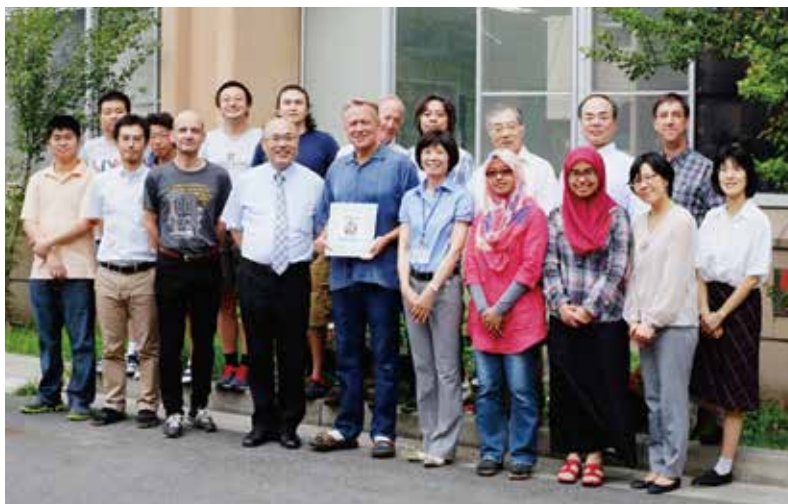
また、アルツハイマー病MR画像診断薬Shiga-Y5の国内および米国特許が成立しました。

認知症研究分野開設記念シンポジウム「アルツハイマー病研究の最前線と認知症医療の将来像」を開催し、臨床医、基礎研究者、大学院生など50名の参加がありました。

平成26年度1月から6月まで、姉妹校であるカナダブリティッシュコロンビア大学医学部精神科Steven R Vincent教授を特任教授として招聘し、大学院生とともにアルツハイマー病に関する協働研究を行いました。その研究の成果をJournal of Alzheimer's disease誌に発表しました。



アルツハイマー病MR画像診断薬
Shiga-Y5の米国特許



Vincent教授(中央)を囲むスタッフ

3. 生活習慣病医学

国民代表集団の疫学研究NIPPON DATA(厚生労働省指定研究)と滋賀動脈硬化疫学研究SESSAを継続しました。また、不整脈の遺伝子検索、糖尿病患者の心・腎イベント発症予測マーカー、内臓脂肪型肥満関連新規遺伝子などについての研究を行い、成果はHypertension誌他多数の国際誌に掲載されました。

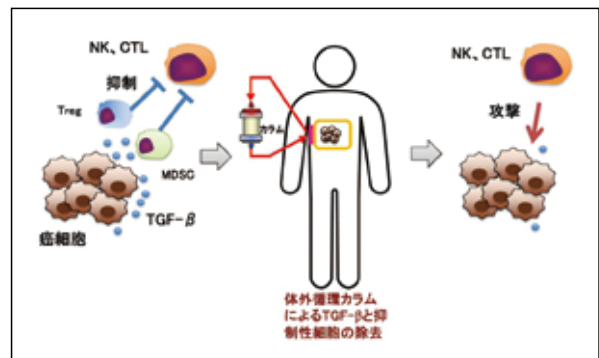
また、NIPPON DATA研究の成果がテレビ等で全国報道されました。



JICA国際協力機構研修「保健衛生管理」を開催しました

4. 総合がん医療推進研究

がんワクチン療法の個別化医療に向けて免疫ゲノムクスに基づいたバイオマーカー探索法の開発に成功し、その成果を国際学術誌(Oncoimmunology, 2015)に発表しました。またLAP陽性細胞除去カラムの開発を行い、抗癌剤とLAP陽性細胞除去カラムの併用で生存日数(ラット)が延長することを明らかにし、また、LAP陽性細胞除去カラムの安全性をサルで確認しました。



5. バイオメディカル・イノベーションセンター

マイクロ波使新規手術支援デバイス:携帯可能な小型・省力型マイクロ波手術機器として、経済産業省「課題解決型医療機器開発プロジェクト」の支援により開発を進め、これまでに無い肩掛け型の携帯型止血器が完成しました。この事業は、福島県における「救急・災害対応医療機器開発事業」として採択・継続されています。

また、「復興促進事業プロジェクト」によりマイクロ波実質臓器凝固切断器の開発を行った事後湯も同じく上記事業に統合され、継続しています。

さらに福島県プロジェクトとしてマイクロ波発信機を超小型化し内蔵するデバイス開発を目的とした「革新的医療機器開発実証事業」にも採択されています。

また、MR画像下の次世代手術システム開発:1月に動物実験用としては世界でもまれな3テスラMR装置が設置稼働した。3月にハーバード大学、東京女子医大・早稲田大学、九州大学の世界でトップを走るMRの治療開発施設が滋賀に集まってMR画像下の医療についてのシンポジウムを開いた。



携帯型マイクロ波手術支援機器



3テスラ動物用MR装置

キャンパスニュース Catch-Up

インドネシア国立脳センター病院と学術交流協定を締結

● 平成26年12月31日(水)

インドネシア国立脳センター病院は、インドネシア初の脳神経外科病院として、平成26年に開院しました。同センターとはかねてより、本学の脳神経外科野崎教授による技術指導等の交流が行われてきました。これらの交流を通じて、本学と同センターの交流協定を締結することとなりました。



バングラデシュ国立心臓財団病院と学術交流協定を締結

● 平成27年2月23日(月)

バングラデシュ国立心臓財団病院は、心臓血管疾患の症例と手術件数が非常に多いバングラデシュ有数の病院であり、これまでに本学のアジア疫学研究センター上島名誉教授、三浦教授が先方の研究者を受け入れ、心臓血管外科浅井教授、呼吸循環器内科堀江教授らが先方の研究者と交流があったことが実を結び、本学と同病院の学術交流協定を締結することとなりました。

調印式には、バングラデシュ国立心臓財団からAwal教授、Ahmed教授、Choudhury教授の3名が本学を訪問され執り行いました。



馬場忠雄前学長がマレーシア国民大学より名誉医学博士号を授与されました

これは両大学の学術交流の開始と発展への功績により、授与されたもので、名誉博士号授与者3名のうち、唯一の外国人受賞者として名誉を受けられました。



小・中・高等学校に対する教育サービス

県内を主とした小・中・高等学校からの依頼を受け、出前授業を行っています。医学・看護学を身近に感じてもらえるように、医学や看護学につながる基本的な学問についての講義や実習を行っています。



メディカルミュージアムの見学

また、膳所高校、虎姫高校、立命館守山高校との間で協定を締結し、本学での講義や実習などの高大連携事業を行っているほか、県



病院内の見学

内の進学校との間で進路別の高大連携事業や、滋賀県教育委員会からの依頼を受けこのコアSSH事業「滋賀サイエンスプロジェクト」を実施しています。

本学での高大連携事業の特徴としては、「先輩からの一言」というコーナーを設け、各高校を卒業した本学学生に依頼し、自身の受験対策と学生生活について話してもらっています。

平成25年6月にオープンした「メディカルミュージアム」では、人体模型、骨格標本、ヒト病理標本、バーチャルスライドシステムを配置しています。各校来訪の際にはミュージアムの見学も行っています。



医学科による顕微鏡を使った授業

開学40周年記念講演会・記念式典・記念祝典を挙行

開学40周年を記念し、平成26年10月3日(金)に記念講演会・記念式典・記念祝典を挙行了しました。

記念講演会では、第62世三千院門主で叡山学院前院長・名誉教授の堀澤祖門氏が、「杵を破る」と題して講演されました。

記念式典では、塩田浩平学長が、「この40周年を機に、我々は来し方を顧み、現状を分析して、これを10年後の50周年に向けた新しいスタートにし、“地域に支えられ、世界に羽ばたく大学”として新たな飛躍を目指す」との決意を述べ、引き続き、文部科学省高等教育局国立大学法人支援課企画官の吉田光成氏、滋賀県知事の三日月大造氏、滋賀大学長の佐和隆光氏、滋賀県医師会長の笠原吉孝氏からご祝辞をいただき、来賓紹介、祝電披露が行われました。

記念祝典では、塩田浩平学長の挨拶に続き、(公財)先端医療振興財団理事長の井村裕夫氏、滋賀県病院協会長の長尾昌壽氏、滋賀医科大学同窓会長の渡邊一良氏からご祝辞を頂戴し、前滋賀医科大学長の馬場忠雄氏発声による乾盃の後、元滋賀医科大学長の佐野晴洋氏、びわこ成蹊スポーツ大学長の嘉田由紀子氏、静岡県公立大学法人理事長の本庶佑氏からスピーチを頂き、本学開学40周年を盛大に祝い、松末吉隆病院長の謝辞で閉会しました。

これらの行事には、来賓、名誉教授、教職員及び学生ら約300名が参加し、滋賀医科大学のさらなる発展を祈念しました。



堀澤祖門氏による記念講演



記念式典の様子

滋賀医科大学女性研究者賞の表彰

優秀な女性研究者の研究活動を表彰することを目的として平成25年度に創設した「女性研究者賞」の表彰式を平成26年10月1日に行いました。代表論文の評価や研究の独創性、発展性など厳正な審査を経て、3名の教員に賞状と副賞を授与しました。

最優秀賞	病理学講座	助教	仲山美沙子
優 秀 賞	女性診療科	助教	竹林 明枝
	社会医学講座	特任助教	近藤 慶子



2015年度「湖医会」総会のご案内

日時／平成27年10月24日(土) 14:00～

場所／滋賀医科大学基礎実習棟B講義室

議 題

1. 2014年度事業報告
2. 2014年度決算
3. 2015年度事業計画
4. 2015年度予算
5. その他

年会費について

医学科卒業会員

会費の割引… 自動引き落とし(口座振替・VISAカード)のすべての利用者は、年会費6,000円が5,000円に割引となります。

会費の免除… 40年(40回)分を納入したとき、あるいは、満65歳に達しそれまでの会費を完納しているとき(本人からの申し出による)は、以後の会費は免除となります。

お知らせ

「湖医会」年会費の自動引き落とし

口座振替をご利用の方は10月12日、
一般VISAカードの方は10月15日となります。



なお、便利な口座引き落としのご利用を
ご希望の方は事務局までご連絡ください!!

お名前・住所・開業・勤務先・メールアドレス等を変更の場合は、
メールまたはファクスで事務局まですぐにご連絡ください。

表紙の写真：バイオメディカル・イノベーションセンター

ご協賛ありがとうございます

ノボノルディスクファーマ株式会社
株式会社東海日動パートナーズかんさい滋賀支店・株式会社 サポルト

(順不同)